

氏名 野本東生

本論文は、中世説話集の代表的作品である『十訓抄』『閑居友』『宇治拾遺物語』について、その編纂の方法を考察したものである。第一章から第三章までの三章計九節から成り、これに序章・終章を付す。

まず序章で、説話集を「語り手」「説話素材」「受け手」の相関において捉える本論文の視点と方法について説明したのち、第一章を『十訓抄』に関する二節で構成している。第一節は『十訓抄』が様々な側面をもつ説話素材を教訓に収束させるために「類比的装い」という方法を用いていることを論じ、第二節ではその具体例として顕頼説話を取り上げ、本来コミュニケーションの不成立を語るものだった説話素材が、賢愚善悪を示す教訓話に仕立て上げられてゆく経緯を分析する。

第二章は、『閑居友』に関する三節から成る。第一節では本書の「あはれ」等の語を豊富な用例とともに分析し、受け手の共感を喚起しつつ仏との結縁へと誘導する編集意図を析出する。これを受けて、第二節では、その結縁が、『発心集』を前提としつつ受け手を臨終行儀へと主体的に立ち向かうよう導くものであることを指摘し、第三節では、女が生きながら鬼になる下巻第三話を取り上げ、その未解決の結末が、受け手に鬼の追善供養を果たすべく促すものであることを論証する。

第三章は、『宇治拾遺物語』に関する四節から成る。第一節では、『今昔物語集』『説経才学抄』等との本文の丁寧な比較を試み、『宇治拾遺物語』が必ずしも原話を保存する度合いが大きいとはいえないこと、またその評語は説話素材の統一的把握が不可能であることを示す面があることを指摘する。第二節では同書の評語を幅広く分析して、一義的な意味や評価に収束させない方法的意識を見出す。第三節ではとくに第九九話を対象とし、当時の有職故実や人物評価に照らしたとき、その話末評は従来言われてきたような主人公の老練さへの評価には限定できず、正負両面の価値評価を導くものであることを解明する。第四節は本書における各話の結末の付け方に焦点を絞り、説話素材の受けとめ方につき既存の枠組みを超えて多層化する働きがあることを見出し、それが『宇治拾遺物語』編者によって意識的になされていると論じている。

説話を文化史的事象に還元し、解体・細分化しがちな現在の研究動向に対し、論者はあくまで説話集に注目し、その文学的方法を志向して粘り強く成果を積み上げている。普遍化を求めるあまり議論がやや抽象的になる面があるなど今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。